

國よりシヤム鶏のよろしき持來り、前文の太兵衛、湯水程懇望なれ共、あたへ高料なれば調達する事難成、子供のうちの二男なるを奉公に遣して、其給金を以シヤム鶏を求て秘藏せり、世の嘶に、子にかへての數寄といふは、此太兵衛ならめと、後に隱居して別宅に有りて、一生鳥と物語りして、七十餘にして身まかりぬ、尤鳥どもの語りする事はなけれども、飼鳥能く啼ば、扱も能く啼たりとほめて、少し餌食惡敷ければ、すり餌は氣に入らぬかと、獨事をいふて餌を直し、鳥のそばにて一日獨り言をいふて暮す、故に鳥と物語りするとやいわん。

〔飼鳥必用〕_下此書は薩州御鳥方比野勘六と云人作之、尤勘六三ヶ津は不及申、諸國歩行し、長崎出島屋敷迄も參り、諸鳥飼方、病鳥の藥餌、并産巢生立方等能覺へ、萬事諸國の鳥、我が工夫を以飼置也、勿論是迄鷹の書は有之候へ共、諸鳥之書無之、右勘六鳥數寄功者成人故、此書を作、_略_下

〔百千鳥〕_下諸鳥病氣の事

風はれとて、急に首筋のあたりはれ上り、餌もくわす、身體自由ならず、かたまりたる様になりて、目をねむり、さのみ元氣も落す、急病也、其時は早く其鳥を手にて能々見べし、はたして風はれ有物也、尤身へ當らぬやうに皮を切也、即時に直るもの也、人のまめなどの様に、たちまちに直り、餌も喰ふ也、急に出る病氣ゆへ、丈夫なる鳥にても油斷ならず、折々庭籠杯へはなし、おく時も、鳥には心を付て見る事、第一の心得也。

諸鳥ともに筋つまる病ひあり、とかく脊中をつよくはねて打時は、皆此病ひに成もの也、鳩の類に多く有直りがたし、十に九は落る、又直にも落す、長引て落る物也、むねを突たるといふは俗言なるべし、頭をつよく打ても、右の病となる也。

口氣咽氣といふも同じ事也、諸鳥にあり、然共先錦鶏しまひよ鳥に多く有煩ひ也、直りがたし、さして命に障る物にてもなし、人の病氣などの様成る物也、鼻つまりて顔のはれる事も有、強き口